

# 南京大虐殺事件の戦後日本文学表現史論—— 東京裁判からのアプローチ

(中山大学) 陳 童君

## 〔要旨〕

本稿は東京裁判を手掛かりとし、戦後日本文学において南京大虐殺事件（＝「南京事件」）がどのように表現されているかを考察したものである。そのために、本稿はまず石川達三の戦後版『生きてゐる兵隊』を「南京事件」の東京裁判の公判録と比較し両者の相違点を確認した。そのうえで、東京裁判以降に発表された石川のもう一つの「南京事件」関連作品である短編小説「旧悪」（1955）と、同じ「南京事件」に取材した堀田善衛の長編小説『時間』（1953～55）および榛葉英治『城壁』（1964）とを互いに照らし合わせながら解説し、同時に中国の「南京事件」関連作品との比較を補助線としつつ、これらの総合的作業によって戦後日本文学における「南京事件」の表現空間を整理した。

## I. 問題提起

1946年7月26日の朝日新聞に「幼な子にも暴行 ウィルソン氏 南京虐殺を暴露」という見出しの記事が掲載されている。この記事は前日の25日に始まった東京裁判の、南京大虐殺事件（以下、「南京事件」と略記）の公判記録を報じたものであり、戦時下に南京大学病院に勤めていた、アメリカ人医師ロバート・ウィルソンの証言が紹介されている。この記事に続き、朝日新聞は7月27日付「あくなき暴行三ヶ月 人類の悲劇 南京の虐殺」、7月30日付「大学構内で連日暴行」、翌月の8月8日付「南京事件」、8月9日付「南京事件師団長の責任」、8月30日付「描く戦慄の白晝夢 南京虐殺の証拠を提出」などの記事を掲載し、さらには同じ1946年から『東京裁判』全8輯を逐次発表し、その第1輯のなかに「南京事件」の公判録の主な部分をまとめている<sup>(1)</sup>。こうした朝日新聞社の尽力によって、戦時下の言論弾圧で封じられた「南京事件」の様相はようやく日本社会に広く知られるようになったのである。

一方で、東京裁判に先立ち、戦時下で上海・南京戦における旧日本軍の残虐行為を描いたために発禁となった石川達三の『生きてゐる兵隊』（『中央公論』、1938年3月）は1945年12月に河出書房より戦後版が刊行された。すでに白石喜彦の労作『石川達三の戦争小説』（翰林書房、2003年）で指摘されているように、この長編小説は当初必ずしも日本軍への批判を意図したわけではなく、石川自身も戦後版の前書きで「この作品によつて刑罰を受けるなどとは予想もし得なかつた」<sup>(2)</sup>と述べている。しかしながら東京裁判の開廷と前後して、『生きてゐる兵隊』は「南京事件」を暴いた作品として読まれるようになり、輿論の注目を浴びていた<sup>(3)</sup>。奥付に「発行 五〇〇〇〇部」と書かれていたこの戦後版『生きてゐる兵隊』は、1948年の八雲書店版『石川達三選集』、1952年の筑摩書房版『現代日本名作選』および1953年の講談社版『現代長編名作全集』のいずれにも収録され、敗戦後日本文壇における唯一の「南京事件」関連作品としてその言説空間を長い間独占していた。

ところで、内容から考えると、戦後版『生きて

ゐる兵隊』は戦中版の伏字や削除された箇所を復元した以外には本文の変化がほとんどなく、当然東京裁判からの影響も存在しないことになる。この点でいうと、戦後版『生きてゐる兵隊』における「南京事件」の言説表現は同時期に流布していた東京裁判のそれと質を異にしているはずである。そのため『生きてゐる兵隊』を東京裁判以降のほかの関連作品と比較することによって、戦後文学における「南京事件」の表現空間の特質がはじめてみえてくるように思われる。今までの「南京事件」関連作品の研究は『生きてゐる兵隊』のみに集中する傾向があったために、ほかの関連テキストへの目配りは不十分で、石川達三以外の「南京事件」表現者への注目は最近になってようやく始まったばかりである<sup>(4)</sup>。また、個々の関連作品への評釈をふまえて「南京事件」の日本文学表現史をトータルに整理する作業もほとんど放置に近い状況にある。実は現在までにこうした作業に取り組んだ唯一の先行論も歴史学者である笠原十九司の執筆したものであった<sup>(5)</sup>。「南京事件」の文学表現史研究の停滞ぶりはこの事実からも窺われるといえよう。

本稿は、まず戦後版『生きてゐる兵隊』を「南京事件」の東京裁判の公判録と比較し両者の相違点を確認する。そのうえで、東京裁判以降に発表された石川のもう一つの「南京事件」関連作品である短編小説「旧悪」(1955)と、同じ「南京事件」に取材した堀田善衛の長編小説『時間』(1953～55)および榛葉英治『城壁』(1964)とを互いに照らし合わせながら解説し、同時に中国の「南京事件」関連作品との比較を補助線としつつ、これらの総合的作業によって戦後日本文学と「南京事件」との相関を明らかにしたい。

## Ⅱ. 東京裁判と『生きてゐる兵隊』

前述したように、東京裁判の進行と並行して、朝日新聞法廷記者団は『東京裁判』全8輯を逐次

発表し、その第1輯のなかに「南京事件」の公判録の主な部分をまとめている(以下『東京裁判1』と表記)。この『東京裁判1』は1946年の初刊本(神奈川近代文学館蔵)のほか、1947年版(日本近代文学館蔵)と1948年版(収蔵館多数)の重版本も存在しており、当時は相当の数の読者を獲得し、「南京事件」の経緯を日本社会に伝えるのに大きな役割を果たしていたと想像される。ところで、「躑躅の花、白く、赤く、土堤の青草の中で匂つてゐた。その土堤に沿うてのぼるコンクリートの坂道は『東京法廷』への道である」<sup>(6)</sup>という書き出しにも窺われるように、『東京裁判1』は単に資料集ではなく、物語風のルポルタージュ作品を志向する文体で構成されている。実際、「南京事件」の東京裁判資料集としてより客観的なものは、1973年に歴史学者洞富雄の尽力でようやく一般読者の目に触れるようになったのであり<sup>(7)</sup>、敗戦直後の日本での「南京事件」の公判録はまず『東京裁判1』のようなルポルタージュ作品の形で紹介された。

一方で、敗戦後文壇における唯一の「南京事件」物語として注目を浴びていたのは石川達三の戦後版『生きてゐる兵隊』であるが、本作と『東京裁判1』とを比較してみると、旧日本軍の残虐行為の語り方において明白な相違が認められる。『東京裁判1』に収録されている「南京事件」の公判録は「世紀の惨 南京事件」というタイトルを持ち、「イ 幼な子にも暴行」、「ロ あくなき残虐三ヶ月」、「ハ 直面する死の恐怖」、「ニ 大学構内で連日暴行」といった4章からなっている。ここで旧日本軍による中国敗残兵や一般人の殺害、女性への強姦、財産の略奪、家屋敷への放火などの残虐行為は当事者の証言によって語られているが、紹介された主な残虐行為は全部で32件あり、その全ては12月13日日本軍が南京を占領した後に発生したものとされている。また、残虐行為の証言者はロバート・ウィルソンや許伝音など占領下

南京で生活していた6人の体験者が担当しており、国籍でいうと、アメリカ人2人と中国人4人から構成されている。

一方で、戦後版『生きてゐる兵隊』は旧日本軍第16師団をモデルとした高島本部隊が1937年の晩夏頃天津近くの大沽に上陸したところから物語が始まり、高島本部隊が上海、常熟、無錫での激戦を経て南京を陥落させるまでの経緯が描かれている。『東京裁判 1』と同様に、この作品にも中国人の殺害、強姦、略奪、放火などの日本軍の残虐行為が詳細に描かれているが、全部で22件に及んだ主な残虐行為の描写のなかで、12月13日の南京占領以後に発生したものはわずか4件のみであり、ほかの18件はすべて南京への進軍中に起こったものとして描かれている。また、『東京裁判 1』では、南京占領以後に発生した中国敗残兵や一般市民の大量殺害は6人の証言者全員によって言及されているが、戦後版『生きてゐる兵隊』の場合、そうした残虐行為は「本当の兵隊だけを処分することは次第に困難になつて来た」<sup>(8)</sup>という曖昧な表現でしか語られていない。そのかわりに、語り手は「南京に駐屯してゐる兵たちには長閑な日が久しぶりでやつて来た」<sup>(9)</sup>という記述もあり、占領下南京の地獄ぶりを強調する『東京裁判 1』の描き方と対照的に、〈熾烈〉な南京攻略戦とその後の〈長閑〉な南京占領との間に明白な境界線を作ろうとしているのである。

このように、『生きてゐる兵隊』が占領下の南京よりも戦場の空間を重視していることは、早くに小田切秀雄「『生きてゐる兵隊』批判」(『新日本文学』、1946年3月)によって指摘されてきた、本作の視点の単一性の問題にも関わっているように思われる。語り手は物語の最初から笠原伍長(無神経な農家の次男)、平尾一等兵(新聞社の校正係だったロマンティックな青年)、福山一等兵(鈍重な職工出)、近藤一等兵(医学士出の神経質な青年)、倉田少尉(繊細な感情の士官)など出身

や個性のそれぞれ異なる兵隊たちを交互に登場させ、熾烈な戦いを繰り広げた日本兵たちの顔を鮮やかに描くことに成功しているのだが、しかし一方で本作に現れた中国人の登場人物は「張青年」という対日協力者をのぞけば、すべて一般名詞の「支那人」、「支那兵」、「姑娘」もしくは代名詞の「僮」で呼ばれており、特定のアイデンティティを持たない〈無名氏〉として描かれている。また、日本兵たちの会話や心内語などの言語表現は語り手によって詳細に報告されている反面、中国人の登場人物はほぼ全員が発話行為をほとんど行わない〈沈黙者〉、もしくは意思疎通のできない〈異人〉として造形されている。さらにいうと、日本軍の南京占領の様相が描かれている小説の後半部で、語り手は占領下の南京を「殆んど支那人の姿はなくて、日本の軍人ばかりがぶらぶらと歩きまわつてゐた」<sup>(10)</sup>場所とし、「無人の市街」、「空虚な都市」、「壊滅の死都」などの表現を多用する。あたかも中国人の〈不在〉を意図的に強調するかのような語り方が行われているのである。

これに反して、『東京裁判 1』において占領下南京における日本軍の残虐行為は中立者の立場を取った2人のアメリカ人のほか、許伝音、尚徳義、伍長徳、陳福宝といった4人の中国人当事者の視点から描かれている。この4人を登場させる際に、まず語り手はそれぞれの当事者の略歴を紹介し、そのうえで直接話法の形で4人に「南京事件」の体験を次々と語らせていく。語られた4つの小さな「南京事件」物語のなかで、彼らは一人称の語り手を担当し、それぞれの独自の南京体験を述べている。『生きてゐる兵隊』で「名」と「顔」と「声」をほとんど持たされなかった中国人の被害者たちは、こうして『東京裁判 1』では主体的表現者として登場するようになっている。もし『生きてゐる兵隊』を中国人表現者の〈不在〉の「南京事件」物語とするならば、対照的に『東京裁判 1』は中国人を主役とした複数の「南京事件」物語から構

成されているといえる。こうした中国人表現者の出現によって、自国本位の立場から戦場心理の探究に特化した『生きてゐる兵隊』の限界が露呈されることになってしまったが、このように東京裁判からの衝撃を受けたため、戦後文学における「南京事件」の表現空間も必然的に変容が要請されたのである。

### Ⅲ. 「旧悪」と『時間』の中国人主人公

『小説新潮』1955年1月の新年特大号に「旧悪」という石川達三の短編小説が掲載されている。書き出しに「拝啓前略、呉孝直氏に関する現在の事業及び過去の素行等についての調査御依頼の件、左の通り御報告申しあげます」とあり、ある探偵事務所からの報告書の形で、「南京事件」で家族の全員を失った中国人主人公の呉孝直が、敗戦後来日して犯人を追跡した経緯を描いている。呉孝直は早稲田出身の元日本留学生であり、1937年に故郷の南京が日本軍に占領された際に両親と二人の妹を失い、それ以来、彼は中国の各地を放浪しながら巧みに身を処し、1946年に再び来日して闇商売に従事している。そのうち、東京で偶然にも母親が生前持っていた腕時計にめぐり合った呉孝直は、その時計を手掛かりとして家族を殺害した下手人が羽田音次郎という元南京占領軍の伍長であることを突き止める。仇を討つために、彼はさまざまな手段を使って羽田元伍長に近づき、最後に羽田を計略的に死に追い詰めたところで作品は結ばれるのである。

『生きてゐる兵隊』と違い、「旧悪」は石川のほとんど知られていない無名の作品であるが、殺害された非戦闘員の中国人から、戦利品としてアクセサリーを略奪するという本作が描いた旧日本軍の暴行は、実は戦後版『生きてゐる兵隊』においても3回にわたって描かれている。また、下手人である羽田伍長の人物造形も『生きてゐる兵隊』に登場する笠原伍長と多分に類似しているので、

「旧悪」はいわば『生きてゐる兵隊』の後日談の趣をもつ作品といえよう。短編小説ということもあり、「旧悪」は内容としては「南京事件」の一挿話にすぎず、本格的な「南京事件」物語とはいえない。しかしながら、視点を日本軍側に限定した『生きてゐる兵隊』と対照的に、本作で石川達三は意図的に被害者側の立場から「南京事件」を語り直そうとし、加害者の元日本軍人に対決を求めた中国人主人公の姿を活写している。すなわち『生きてゐる兵隊』で名前も発話行為もほとんど付与されなかった被害者の中国人は、「旧悪」に「名」と「顔」と「声」を持つ主体的な行動者として登場するようになっている。こうした描き方の違いは石川自身の創作態度の変化を意味するほか、東京裁判以降訪れた「南京事件」の表現方法のモード転換をも表しているように思われる。

たとえば「旧悪」に先立ち、いわゆる「戦後派」作家の一人である堀田善衛はすでに中国人を主人公とした「南京事件」物語を構想し、1953年から1955年にかけて長編小説『時間』を発表している。この作品は当初分載の形で各章が別々の雑誌に発表され、1955年4月に新潮社より単行本が刊行されたのである。作品は日中戦争下の南京で生活していた一人の中国人の手記という形を取り、主人公陳英諦の見聞と思索を中心に1937年の日本軍の南京侵攻およびその後の南京占領の様相を描いている。

東京裁判以後発表された作品であるだけに、堀田善衛の『時間』は東京裁判からの影響が色濃く反映されている。主人公の陳英諦＝〈わたし〉は南京国民政府に就職している洋行帰りの官吏として設定され、南京陥落の後、敗残兵と誤られて日本軍に連行され、西大門で集団銃殺に遭って「機関銃の発射される瞬前に死伏し」<sup>111</sup>たという。その後、〈わたし〉が屍の間から出て来て近所の空家に隠れ、虐殺を逃れて「文字通り万死に一生をえ」<sup>112</sup>るまでの体験が描かれている。こうした〈わ



たし)の経歴は東京裁判において「南京事件」の中国側の証言者として活躍した許伝音と伍長徳の姿を彷彿とさせる。イリノイ大学の文学博士である許伝音は〈わたし〉と同じように洋行帰りの国民政府の官吏であり、戦時下は南京紅卍字會に務め、難民の救助と死体の処理に従事していた。東京裁判の際に許伝音は「南京事件」の目撃者として出廷し、前述した『東京裁判 1』では「市内を占領した日本軍は非常に野蛮で、人を見付け次第、片つ端から射殺した」<sup>13)</sup>と当時の模様を詳述している。それに対して、伍長徳は元々南京市の警官であるが、12月15日に敗残兵として連行され、〈わたし〉と同じように西大門で集団銃殺に遭っている。『東京裁判 1』において数少ない生存者の一人として登場している伍長徳は、「機関銃の発射の直前にうつ伏せ」「死体のなかから這ひ出して近所の空家に隠れてゐた」<sup>14)</sup>自身の体験をリアルに語っている。『時間』における〈わたし〉の南京での体験は許伝音と伍長徳のそれらと重ねているところが数多く認められるので、執筆当時の堀田が「南京事件」の公判録を作品の素材として用いていたことが推定される<sup>15)</sup>。また、これら中国人視点から語られた残虐行為のほとんどは『生きてゐる兵隊』に描かれていないものであり、東京裁判をターニングポイントに、戦後文学における「南京事件」の表現空間が大きく変容していることはこの点においても確認できるといえよう。

ところで、『時間』は残虐行為の表現において東京裁判に多大な影響を受けているものの、本作に用いられている自他表現の手法と東京裁判のそれとは根本的に相違するところもある。たとえば前述の『東京裁判 1』において、占領下南京における日本軍の残虐行為は証言者たちのそれぞれの体験談によって詳述されているが、その反面、証人たちに対する日本側からの反対尋問は、「岡本、クライマン、伊藤各辯護人が起つた」<sup>16)</sup>とか、「次いで神崎、伊藤両辯護人が反対尋問に起ち、終わ

つて許証人は退廷した」<sup>17)</sup>といったような部分的記述によって省略されている。被害者側と加害者側の自他表現に向けられる語り手の眼差しの温度差は露骨だが、実はこのような語り方は『東京裁判 1』に限らず、おおよそ半年後に刊行された東京新聞社版の東京裁判報告『裁かれる日本 アジア失樂園』<sup>18)</sup>において、日本側の「南京事件」についての反対尋問もわずかな程度の紹介にとどまっている。すなわち被害者側の中国人たちの自他表現をほとんど黙殺した『生きてゐる兵隊』を彷彿とさせるように、敗戦直後の日本で流布していた東京裁判の「南京事件」記述は加害者側の自他表現が抑制され、立場こそ逆転したが、一方通行の語り方がほとんど変わることなくそのまま用いられているのである。一方で、戦後日本の文壇で、堀田善衛の『時間』は中国人を主人公とした最初の「南京事件」物語であり、戦争相手である〈他者〉の眼差しをいかに活用できるのかという問題意識は明らかに作者の創作理念の中核をなしている。『時間』の発表によって、戦後文学における「南京事件」の表現空間は新しい地平が開かれることになったわけであるが、こうした『時間』の表現史的意義は中国側の「南京事件」作品を参照して考えるならば、一層明白にみえてくるように思われる。

#### IV. 『南京的虐殺』からの逆照射

実は東京裁判が始まる直前の1946年2月に、「南京事件」を表題にした戦後初めての単行本作品である『南京的虐殺』が中国の上海で刊行されている<sup>19)</sup>。副題に「抗戦以来報告文学選集」とあるように、この作品集は中国の抗日戦争をテーマとしたルポルタージュ作品のアンソロジーであり、なかでも特に「南京事件」を真っ正面から問いかけているのは倪受乾「我怎樣退出南京的」(私がいかに南京を脱出したのか)と汝尚「当南京被虐殺的時候」(南京が虐殺されたとき)の2篇である。

倪受乾「我怎樣退出南京的」は南京防衛軍の下士官である「我」＝「私」の視点に立ち、南京が陥落するまで日本軍と激戦した中国軍の抵抗ぶり、南京を脱出するまで「私」が目撃した被占領下南京の惨状を描いている。それに対して、汝尚の「当南京被虐殺的時候」(南京が虐殺されたとき)は南京市民の一人である「私」を語り手とし、急病のために陥落後の南京に残ってしまった「私」の、日本占領軍の残虐行為についての見聞を報告している。二つの作品は同じく一人称の語り手を使い、当事者視点の「南京事件」体験を実況中継に近い形で語っているところに話法の共通点がある。また、「報告文学」と銘打たれているものの、実際に二つの作品はいずれも半分以上の内容を出来事の報告ではなく、語り手である「私」の内面描写に割いており、日本軍の残虐行為に対する「私」の恐怖や憎悪などの心理表現が作品の主な部分を構成している。一方で、日記体小説である堀田善衛の『時間』も同じく「南京事件」の当事者である〈わたし〉の見聞報告にリアルタイムの心理活動の描写を交錯させる形をとっており、「南京事件」の経緯を報告しながら当事者の内面の葛藤を描くことに作品の眼目が置かれている。すなわち使用言語が異なり、単行本の刊行時間も約10年の隔たりがあるにもかかわらず、『時間』と『南京的虐殺』における「南京事件」の表現空間に同じ類型の話法が用いられている、という現象が見られるのである。

実は『南京的虐殺』が刊行された1946年に堀田自身も上海に滞在しており、日本人留用者として中国政府の対日文化工作に従事していた。当時の堀田の主な仕事は現地上海の対日輿論調査と日本関係の出版物の整理であったので、『南京的虐殺』のような話題作は自然に彼の目に留まっていたはずである<sup>20)</sup>。この点でいうと、『時間』の創作に対する『南京的虐殺』の直接的影響の可能性も考えられるが、ところで同じ類型の話法を用いなが

らも、『時間』と『南京的虐殺』における加害者／被害者の相関図の描き方が大きく異なっているという事実はより興味深いことであるように思われる。

たとえば『南京的虐殺』に収録された前述の二作品は南京防衛軍の下士官である武と徐金奎、そして一般市民である尚、蔡君、張徳、金宝など数多くの中国人当事者を登場させ、全部で41箇所遍及ぶ会話文を通して「南京事件」の被害者側の「顔」と「声」を生々しく再現しようとしている。一方で、同じ作品に登場している加害者側の日本人は全て「敵軍」、「敵人」、「暴敵」、「魔鬼」および「鬼子」といった5種類の呼び方で描かれており、名前をもった日本人は一人も登場せず、日本人による発話行為も一切描かれていない。元々一人称の自己言及の話法はしばしば「自」を絶対視して「他」を疎外することになりがちであるが、『南京的虐殺』においてそうした視点のバイアスは、〈人間性〉のある中国人被害者と、〈没人間性〉の日本人加害者との対立構図設定のなかに現れているといえよう。実際、こうした対立構図の設定は同じ1946年に刊行された譚道平の戦記作品『南京衛戍戦史話』(東南文化事業出版社)と張恨水の長編小説『大江東去』の戦後版(南京新民報社)にも用いられており、同時期の中国で流通していた主な「南京事件」作品の共通点でもある。

一方で、堀田善衛の『時間』で同じく一人称の語り手を担当している中国人主人公の〈わたし〉は、本作では抵抗者と協力者の二重身分を持つように設定されている。〈わたし〉は陥落後の南京で国民政府の地下工作員を務める一方で、桐野という日本軍将校の家に下僕と偽装して働くことになる。桐野を見るたびに〈わたし〉は虐殺の記憶を喚起され、「鬼子という言葉」を「使いでもしなければ到底気のすまぬとき」<sup>21)</sup>があると告白する。しかし同時に、「鬼子」という呼び方が「長い時間のあいだには、必ずや人々の判断を誤り、

眼を曇らせるであろう」<sup>22</sup>とし、南京の日本占領軍を「鬼」ではなく、あくまでも「人間」として観察する必要性を唱えている。〈わたし〉にとって同居者である桐野は南京を占領している「敵」である一方、召集された元大学教授として、「家のなかに話相手となりうる一人の知識人」<sup>23</sup>であるともされている。桐野との対話を通して〈わたし〉は彼の戦争責任を持続的に追及しているのだが、他方では「話しているうちに、目の前で崩壊してゆく」という彼の寂寥感を看取し、「逃亡と暴発、これが南京暴行の潜在的理由ではないだろうか」<sup>24</sup>と問いかける。すなわち中国人主人公の〈わたし〉は抵抗と協力の狭間に生きている自身の立ち位置の揺らぎを追究する一方、他方ではしばしば日本人占領者の内面を代弁するかのようには振る舞い、残酷な侵略者と良識のあるインテリとの間を行き来する桐野の二重性格を解剖しようとしている。

このように加害者／被害者の二項対立を拒否することによって、それまで戦後版『生きてゐる兵隊』、朝日版『東京裁判 1』および『南京的虐殺』などの先行テキストのなかに使用されてきた一方通行の話法はようやく乗り越えられ、〈他者〉との対話によった「南京事件」表現の可能性が新たに提示されることになったのである。実は『時間』の初版本が刊行された1955年の7月に、同じ「戦後派」作家の三島由紀夫も「南京虐殺の首謀者と目された男」を主人公とした短編小説の「牡丹」を雑誌『文藝』に発表しているのだが、『生きてゐる兵隊』と同じく加害者側の単一視点に終始した「牡丹」の「南京事件」表現は、被害者と加害者との対話を描くことによって重層的な「南京事件」像を構築しようとしている『時間』の試みの画期性を逆照射する。そして、こうした『時間』の画期性を受けて「南京事件」の表現空間の圏域をさらに拓こうとした後続作品として、やがて榛葉英治『城壁』というもう一つの長編小説も現れ

てくるのである。

## V. 〈到達〉と〈終焉〉としての『城壁』

戦後初めての戦争文学アンソロジーにあたる『昭和戦争文学全集』（全15巻・別巻1）は1964年から65年にかけて集英社より刊行されている。第3巻『果てしなき中国戦線』の巻頭を飾る二つの長編作品に石川達三『生きてゐる兵隊』と堀田善衛『時間』が選ばれており、「南京事件」は全集の編集者らに重要なテーマとして意識されていたことが窺える。ところで、実はこの全集の刊行と前後して、榛葉英治『城壁』というもう一つの「南京事件」物語も発表されていたことはほとんど知られていない。この作品はまず『文藝』1964年8月号に「書下ろし長編小説三〇〇枚」として掲載され、同年の11月に大幅な加筆を施したうえ河出書房新社より単行本が刊行されたのである。

作者の榛葉英治は今でほとんど忘れられた作家であるが、1912年生まれで早稲田英文科出身の彼は、戦時中いわゆる「満洲国」の外交部で日系官吏を約6年間務め、敗戦まで中国の長春で外地生活を送っていた。このあいだ、彼は英文学者として満洲の日本語総合雑誌『藝文』に研究論文を寄稿していたが、引揚げ後の1949年2月に自身の敗戦体験を素材として自伝風の短編小説「鉄条網の中」を雑誌『文学者』に発表し、さらには1958年に同じ満洲を舞台とした長編小説『赤い雪』をもって直木賞を受賞した。『城壁』は直木賞の受賞で人気作家になった彼が、その後執筆した最初の長編形式の戦争小説である。また、後述するように、日本語で書かれた「南京事件」の長編小説の3作目にあたるこの作品は、同時に戦後日本文学における最後の本格的な「南京事件」物語にもなっているのである。

加害者側の日本軍の視点を用いた『生きてゐる兵隊』と被害者である中国人主人公の視点を用いた『時間』に対して、榛葉英治の『城壁』は日本

軍／中国人／第三国の欧米人といった3派の視点を同時に使っているところに特色がある。まず、日本軍側の視点を担当している主要な登場人物は南京占領軍の一部隊である、江藤小隊の隊長＝江藤少尉と彼の部下＝倉田軍曹である。本作で大学出の知識人と設定されている江藤少尉は日本軍の良心を代弁し、集団の虐殺に受動的に関与しながら戦争の不条理を訴えている。それに対して百姓出身の倉田軍曹は日本軍の残虐性の化身を演じる者であり、語り手は鬼軍曹倉田と江藤少尉との対決を繰り返し描くことによって加害者視点の「南京事件」物語を構成している。ヒューマンズのインテリ江藤VSファシストの百姓倉田という二元対立の構図は、『生きてゐる兵隊』における倉田少尉VS笠原伍長の構図をほぼそのまま踏襲したものであり、ここでは前後約20年を隔てた二つの「南京事件」物語のあいだに鮮明な継承関係が認められることになるのである。

一方で、『城壁』において、被害者側の視点を主に担当しているのは黄土生という中国人青年である。南京のキリスト教青年会で働く国際的な知識人として設定される黄土生は元々政治に対して無関心であり、日本軍の侵攻も受動的に傍観していた。しかし占領軍の様々な残虐行為を目の当たりにしてから彼も次第に抵抗の意識が強まり、やがて戦線を通り抜け中国軍の防衛地域へと脱出していくまでの経緯が描かれている。『時間』の主人公である陳英諦と比べて、あくまで登場人物の一人として現れた黄土生はそれほど鮮やかに造形されているわけではないが、彼の内面に一体化し、抵抗と協力の狭間に生きる占領下南京の中国知識人の苦悩を描こうとしている語り手の視線は、前述の堀田善衛『時間』にみてきたのと同じタイプの表現志向を表している。実際に同時代評においても『城壁』はしばしば『時間』と比較され、それとのつながりが強く意識されているのである<sup>26)</sup>。

ところが一方で、本稿のはじめにも紹介したよ

うに、敗戦後の東京裁判では被害者側の中国人だけでなく、当時南京に留まっていた第三国の欧米人らも虐殺の証言者として発言していたのだが、堀田の『時間』は中国人視点の「南京事件」物語を構成する一方、それら欧米人を登場させた場面がわずか3箇所しか見られず、「南京事件」における第三人側視点の視点を生かすことに成功していないといえる。それに対して、初刊本の「あとがき」で榛葉英治は『城壁』に用いた主な素材に「ティンパーリー著『外国人の見た日本軍の暴行』」があると述べており、「南京事件」を描く際に第三人側視点の視点を重視していることを明らかにしている。

ここにいう『外国人の見た日本軍の暴行』とはオーストラリア人記者のティンパーリーが1938年に編集した「南京事件」関連の資料集*What War Means: The Japanese Terror in China: a Documentary Record* (London, Victor Gollancz) の日本語訳である。日本軍が南京を占領した際、難民保護にあたった南京安全区国際委員会の欧米人の委員たちが占領下南京の悲惨な状況を記録した一連の報告書がここに収められている。英語の原書は戦時下で「南京事件」の様相を欧米諸国に知らせるために大きな役割を果たしたものであり、中国でも同じ1938年にいち早く訳本『外人目睹中之日軍暴行』が刊行されている<sup>28)</sup>。日本では言論統制のために公刊が許されなかったが、榛葉英治の回想によると、戦争末期の1944年、彼は旧満洲国外交部の官吏として南京日本大使館を訪れた際に「同僚の某氏から初めて南京の残虐を教えられ、日本語訳のこの本を見せられ」、戦後「或る筋からティンパーレイ著『外国人の見た日本軍の暴行』のこの本を手に入れることができ」、「この資料を基に、南京の残虐をテーマにした小説『城壁』を書いた」のだという<sup>29)</sup>。

榛葉が入手した日本語版『外国人の見た日本軍の暴行』は訳者も版元も記載されていないが、内



容は中国語版『外人目睹中之日軍暴行』の重訳本にあたり、「日僑前後連絡総處」という判も押されているので、中国政府が匿名者の日本居留民を動員して翻訳させたものであろうと推測される。この本に登場している南京安全区国際委員会の欧米人たちも多く匿名になっているが、実名で現れた委員長のラーベ、秘書のスミス、そして国際委員会の委員で宣教師でもあるミルス神父の3人は『城壁』にも第三人側票の主要な視点人物として登場している。また、人物造形にバリエーションを与えられた3人は、本作では異なる役割を担われることにもなっているのである。

まずドイツ人のラーベは単純明快な正義漢として造形され、難民保護のために日本軍と折衝する一方、文明国人の自負をもって日本軍の残虐行為を告発してやまない。それに対して、皮肉屋として造形されたアメリカ人のスミスはラーベの正義感に共感しながらも、他方でナチス党員のラーベが日本軍の共犯者でもあることをしばしばシニズムをもってほめかし、同時に自身の傍観的立場の無力さをも絶えず自己批判している。こうした立ち位置の差異化によって、『城壁』における第三人視点の「南京事件」物語は重層的な構造を持つことになるが、そのうえ、現実の南京で宣教活動に従事していたミルス神父も本作で中国語と日本語の両方に堪能な多言語話者として設定されている。

ミルス神父は一方で黄土生の苦悩に共感を示し彼の脱出に協力するが、他方では江藤少尉の告白にも耳を傾け、彼の罪責感を理解し慰みを与えようとする。このように被害者と加害者の両方に一体化しようとしているミルス神父は架け橋として格好の役割を果たすことになるが、一方で宗教の普遍性をもって敵同士の和解を図ろうとしながらも次々と挫折してしまうミルス神父の無力感も描かれ、加害者と被害者とのあいだに歴然と存在している自他認識の断層と、虐殺の現実の前に表れ

る宗教の限界がクローズアップされている。そして、以上の3人はいずれも物語の進行とともに安全区委員会発の公文書や知人宛ての書簡を次々と綴っている。メタレベルで記されているこれら「南京事件」の記録は『外国人の見た日本軍の暴行』をそのまま引用しているものがほとんどであり、『城壁』における3人の役割はいわば『外国人の見た日本軍の暴行』を一個のメタテキストとして本作に挿入させたことにあるといえる。それによって語り手は第三人視点の「南京事件」物語を生成させるとともに、占領下南京における第三人たちの多重性をもった立ち位置の意味を追究したのである。

このように『生きてゐる兵隊』、『東京裁判 1』、『時間』、『外国人の見た日本軍の暴行』などの先行テキストの表現空間を包摂しながら、さらに多国籍視点の総合的運用によって「南京事件」の全体像に迫ろうとした野心作が『城壁』だったのである。本作はモンタージュのような場面転換を頻繁に行っているために、個々の登場人物に対する内面の掘り下げの不十分さやストーリー全体の整合性の乱れなど足りないところも多いが、戦後文学の「南京事件」表現史を考える場合に、現在まで研究者らの冷遇を受けてきたこの無名作品の立ち位置は決して看過できないものといえよう。とくに、作品全体の流れを加害者側の視点と被害者側の視点から同時に進める一方、こうした対立する敵同士の物語を第三者視点の媒介を通して統合していくという『城壁』の独自の叙述法は、それまでの先行テキストの話をさらに発展させたものとして、「南京事件」表現史の新たな一頁を開くことになったのである。後述するように、『城壁』が発表された1964年時点では「南京事件」の歴史学研究はいまだ不毛であったので、異なる立場の当事者たちの視点を統合して活用するという今日の「南京事件」研究がよく用いる方法は『城壁』が先立って実現させたことになる。一方で、『城壁』

に遅れること4年、当時文壇の人気作家であった五味川純平も長編『戦争と人間 劫火の狩人』（三一書房、1968年）のなかの一章で「南京事件」を描いているが、中国人抵抗者の梁恩生、日本占領軍の柘植少佐、そして陳医師と匿名の白人医師といった三つのグループの視点から重層的な物語を構成しようとしたその手法は、『城壁』の叙述法をそのまま踏襲しているかにみえる。この点からも『城壁』の「南京事件」表現史における立ち位置の意義が窺われるだろう。

## VI. 文学と歴史学とのあいだ

敗戦後の20年間は日本文学における「南京事件」表現史の黄金時代といえるが、歴史学の分野において、この時期は逆にその暗黒期にあたるものといえる。たとえば1953年に歴史学研究会の編集で刊行した『太平洋戦争史Ⅱ 中日戦争』（東洋経済新報社）には「南京事件」関連の内容はわずか1頁しか見られず、その内容も実はエドガー・スノー『アジアの戦争』の一部分を訳載したものであった<sup>28</sup>。そして1961年刊の秦郁彦『日中戦争史』（河出書房）において、「南京事件」への言及は若干増えたものの、それでも3頁足らずの分量にすぎなかった。よく知られているように、戦後における「南京事件」の歴史学研究は1967年に洞富雄『近代戦史の謎』（人物往来社）の刊行によってようやく本格的に行われるようになった。敗戦から1960年代の半ばまでの20年間のあいだ、文学者は明らかに歴史学者をリードする形で「南京事件」の表現空間を構築していたのである。

しかしながら、70年代以降、「南京事件」の歴史学研究が徐々に活発化するようになったのに反して、逆に文壇のほうが急速に停滞期に入ってしまったのも事実である。とくにいわゆる「南京事件論争」が熾烈に行われていた70～80年代の20年間に於いて、文壇側の沈黙ぶりはひときわ目立つものであった。この時期、本多勝一『中国の旅』（朝

日新聞社、1972年）や鈴木明『「南京大虐殺」のまぼろし』（文藝春秋社、1973年）などのジャーナリストによる「南京事件」の調査報告がしばしば言論界の話題となり、激しい論争を惹起することによって「南京事件」の歴史学研究を強く刺激していたが、しかし一方で、若干の内容が「南京事件」の東京裁判の審理場面にふれた豊田穰『小説東京裁判』（講談社、1983年）と山崎豊子『二つの祖国』（新潮社、1983年）を除き、この時期発表された「南京事件」をテーマとした本格的な物語作品は管見の限り一作も確認できず、専業の文壇作家たちは「南京事件」の表現舞台から完全に姿を消していたようにみえる。

そして1990年代以降、「南京事件」は村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル 泥棒かささぎ編』（新潮社、1994年）、古山高麗雄「過去」（『すばる』、1995年6月）、伊藤桂一「南京城外にて」（『丸』、1997年8月）、山本弘『神は沈黙せず』（角川書店、2003年）、船戸与一『灰塵の暦』（新潮社、2009年）などの小説作品のなかに再び登場するようになる。しかしながら、村上の近作『騎士団長殺し』（新潮社、2017年）と同様、前述の作品の全ては「南京事件」を日中戦争の一つのエピソードとしてわずかに素描したものにとどまり、「南京事件」を真正面から問いかけた作品は存在しないし、石川達三『生きてゐる兵隊』、堀田善衛『時間』および榛葉英治『城壁』の水脈を継ぐべき4番目の「南京事件」長編物語もつい今日にいたるまで誕生していないのである。

以上のように、「三大長編の時代」（45～60年代）、「物語不在の時代」（70～80年代）、「群小挿話の時代」（90年代～現在）としてまとめることが可能な戦後日本文学の「南京事件」表現史を俯瞰するならば、そこには作家たちの表現意欲の衰退だけでなく、「南京事件」の文学表現それ自体が次第に変質していった事実もみえてくる。たとえば前記した伊藤桂一の戦記小説「南京城外にて」のな

かに、1937年の南京攻略戦に関する次のような描写が見られる。

「班長。自分は、この南京城外で大休止した時から、当時のことが頭のなかに浮かんで、とても眠られそうにないな、と思っていたのです。南京攻略戦の時、自分は部隊長専属のラッパ手として、中華門一番乗りを狙う部隊にまじっていたのです」と、感慨深い口調で、話し出した。(略)分隊員の岩崎上等兵が、南京攻略戦に加わっていたとは、意外だった。岩崎上等兵は、今回の部隊編成以来、身近につきあってきた、頼りになる古参兵である。岩崎上等兵は、河村分隊長が、対八路戦のきびしい実状をあれこれと話してくれたので、たまたま、南京城外で休止した時、当時のことを、きいてもらいたく思ったのだろう。(略)河村軍曹は、岩崎上等兵と並んで、煉瓦塀に背を凭せ、「対八路戦を戦いぬいてきた分隊長と、南京一番乗りのラッパ手岩崎上等兵とがいれば、この分隊も、向かうところ敵なしじゃないか。がんばっていきましょう」と、いい、岩崎上等兵も、「話をきいていただいて、安心して、眠れそうです。班長、しきりに星が流れますね。今宵は、いい夢をみられそうです」と、いった<sup>29)</sup>。

戦争末期の1944年に南京で行軍の休止をしていた河村軍曹が、部下である岩崎上等兵に7年前の南京攻略戦の経緯を聞かされる場面が描かれている。南京攻略の主力部隊である第6師団の一兵士だった岩崎上等兵は「南京城外で大休止した時から、当時のことが頭のなかに浮かんで、とても眠られそうにない」とし、南京戦に加わっていたときの体験を回想する。岩崎の語りによって、7年前に彼が「中華門一番乗りを狙う部隊にまじって」決死奮戦したときの情景は「轟々と実感がこもる」

ものとして伝えられてくるが、それを聞いている河村軍曹は自身の山西省での戦争体験との共通点をそこに見出し、「対八路戦を戦いぬいてきた分隊長と、南京一番乗りのラッパ手岩崎上等兵とがいれば、この分隊も、向かうところ敵なしじゃないか」と連帯感を訴える。こうした反応を受けて、それまで南京攻略戦の記憶に囚われていた岩崎は「話をきいていただいて、安心して、眠れそうです」とし、「今宵は、いい夢をみられそうです」と述べたところで物語は結ばれるのである。

主人公岩崎上等兵の所属した第6師団という旧日本軍の部隊が「南京事件」の主要な関与者であり、師団長の谷寿夫が敗戦後に虐殺の罪に問われて処刑されたのは周知のことである。また、いわゆる「南京事件まぼろし論」に最初に火をつけたのも元第6師団の復員兵たちであるので<sup>30)</sup>、長らく戦記小説家として活躍していた伊藤桂一は当然それらの情報を把握していただろう。「南京城外にて」の主人公はいわば「南京事件」に深く関わった者として設定されているようにみえるが、本作で岩崎上等兵が南京体験を語る行為は日本軍の決死奮戦の勇者ぶりを再確認するところにのみ意味があり、「安心して、眠れそう」になるための自慰手段としてしか機能していないのである。

1917年生まれの伊藤桂一はいうまでもなく戦後文学者の一員である。しかし「南京城外にて」を戦後文学の「南京事件」表現史に照らして見るならば、それは視野の極端な狭小化と、想像力の大きな後退であると言わざるを得ない。敗戦後の20年間において、堀田善衛や榛葉英治などの戦後文学者らは先輩作家石川達三の達成点と限界を踏まえ、様々な〈他者〉の視点から「南京事件」の表現空間の圏域を着々と開拓していった。また、「南京事件」の歴史学研究がいまだ不毛だった時代に、東京裁判の公判録などの限られた史料を慎重に使い、それらの参考価値を最大限に生かすことにもチャレンジした。しかしこうした同世代者

の探し求めた可能性が半世紀後の伊藤桂一の作品に継承された形跡は一切見えない。伊藤の作品は〈他者〉の視点を所有したいという志向性もなく、多方面の史料を踏査した努力もなく、物語の対話性を求めて事件の表現空間を豊かにしようとする意欲も認められない。自己本位の表現に終始している「南京城外にて」のテキストは、南京戦当時の日本軍の宣伝記事を想起させるものとして、戦後日本文学における「南京事件」表現の変質ぶりを如実に物語るものである。この変質の経緯とその原因を解き明かすことは「南京事件」表現史の研究に不可欠な作業であり、また、戦後文学史の新たな一側面の読み直しにもつながるものといえよう。本稿はその最初の小さな一歩となれば幸いである。

# [注]

- (1)朝日新聞法廷記者団著『東京裁判 1 軍閥大陸へ侵攻す』ニュース社、1946年。
- (2)戦後版『生きてゐる兵隊』河出書房、1945年、1 頁。
- (3)「裁かれる残虐『南京事件』 石川達三氏語る」(『読売新聞』、1946年 5 月 9 日)。
- (4)拙稿「研究ノート 堀田善衛『時間』と南京大虐殺事件」(『日本近代文学』2017年 5 月号)を参照されたい。
- (5)笠原十九司「日本の文学作品に見る南京虐殺の記憶」、『記憶の比較文化論——戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、2003 年。
- (6)同注 1、2 頁。
- (7)洞富雄編『日中戦争史資料 8 南京事件 I』河出書房新社、1973年。また、1948年に富山房は『極東国際軍事裁判公判記録』(笹森順造ほか編)の逐次刊行を試みていたが、翌年に第2巻で未完成のまま終わってしまった。
- (8)同注 2、127頁。
- (9)同上。
- (10)同上、130頁。
- (11)『時間』新潮社、1955年、111頁。
- (12)同上、85頁。
- (13)同注 1、275頁。
- (14)同上、282頁。
- (15)また、秦剛「堀田善衛『時間』が問いかけたこと」(坪井秀人編『東アジアの中の戦後日本』臨川書店、2018年)も指摘しているように、『時間』を執筆する際の堀田は朝日新聞社版の公判録だけでなく、数種の市販の公判録を併せて参照した可能性が高い。
- (16)同注 1、274頁。
- (17)同上、280頁。
- (18)唯人社、1947年。
- (19)以羣編、作家書屋刊。また、『南京的虐殺』は 1943年11月に『戦闘的素絵』という題名で同じ作家書屋より重慶で刊行されたこともある。
- (20)堀田の留用体験については、拙著『堀田善衛の敗戦後文学論——「中国」表象と戦後日本』(鼎書房、2017年)を参照されたい。
- (21)同注11、76頁。
- (22)同上。
- (23)同上、138頁。
- (24)同上、217頁。
- (25)河上徹太郎「文芸時評 上」『読売新聞』夕刊、1964年 7 月27日、奥野健男「八月号の文芸雑誌」『東京タイムズ』、1964年 7 月30日。
- (26)楊明訳、漢口民国出版社。
- (27)榛葉英治「解説」、復刻版『外国人の見た日本軍の暴行』所収、評伝社、1982年、241頁。榛葉の「解説」によると、この復刻版の底本は彼自身が「秘蔵していたティンパレイ原著、日本文訳の『外国人の見た日本軍の暴行』」なのだという(同、242頁)。
- (28) *The Battle for Asia*, Random House, New York, 1941, p56-57.



(29)「南京城外にて」(『丸』, 1997年8月), 197頁。

(30)五島広作編『南京作戦の真相 熊本六師団戦記』  
東京情報社, 1965年。

#### [附記]

本稿はNSSFC基金「美国占領時期日本文学雑誌的中国表述研究」(17CWW005)による研究成果の一部である。

## 中国研究所図書館利用案内

### ●所蔵資料：

所蔵数は約45,000冊。戦前から現在まで中国において発行された社会科学・人文科学系の図書、定期刊行物を所蔵しています。

### ●開館日時：月曜日（予約制）午前10時～正午，午後1時～5時

### ●利用料金：

	閲覧料	複写料
所員	無料	10円
研究会員	無料	20円
一般（団体）	1,000円	100円
一般（個人）	700円	30円
大学生・大学院生	300円	20円
留学生	無料	20円

### ●利用方法：

書庫は閉架式をとっています。館内備付けのカード目録またはCiNii Books (<http://ci.nii.ac.jp/books/>)にて請求記号をお調べください。係員が書庫より資料をお持ちします。なお、館外への貸出しは行っていません。

### ●資料郵送・FAXサービス：

所蔵する図書資料等の複写をご希望の場合は、郵送またはFAXで送付いたします。料金等詳しくはお問い合わせください。

### ●お問合せ先：

中国研究所図書館

TEL：03-3947-8029 FAX：03-3947-8039

E-mail：c-lib@tcn-catv.ne.jp URL：http://www.chuken1946.or.jp/

